

都市デザイン研究室 OB・OG、日本不動産学会賞受賞！

Old Boys of Urban Design Lab. got The Japanese Real Estate Sciences Prize!

text_OKAYAMA/M1

11月上旬、都市デザイン研究室に嬉しい知らせが届いた。OBである今村洋一さん(2009.3 博士修了)が『旧軍用地と戦後復興』で日本不動産学会著作賞(学術部門)、越野あすかさん(2017.3 修士修了)が『地域構造と所有・流通から見た歴史的市街地における空地の実態に関する研究 - 福井県坂井市の旧三国町地区を対象として-』で同学会湯浅賞修士部門を受賞されたのだ。湯浅賞の受賞について越野あすかさんに伺った。

◆湯浅賞

日本不動産学会が授与する学生の論文賞。修士部門、博士部門があり、独創性と将来性に富んだ、不動産学の発展に対して貢献をした論文の著者に対して送られる。(参考：日本不動産学会各賞 http://www.jares.or.jp/award/award_roncho.html)

◆近年の主な都市デザイン研究室 OB&OG 過去の湯浅賞受賞者とその論文

中島伸(2013 博士)「震災復興土地区画整理事業による街区設計と空間形成の実態に関する研究 - 東京都震災復興土地区画整理事業地区を事例として -」
矢吹剣一(2011 修士)「歴史的市街地における空き家再生活動に関する研究 - 空き家活用マネジメントと地区再生への展開に着目して -」
江口久美(2010 博士)「1890年代から1930年代の古きパリ委員会による歴史的環境保全に関する研究 - 歴史的記念物をめぐる都市的視点の導入と展開 -」
永瀬節治(2009)「近代日本における参詣空間の創出に関する研究 - 明治期から昭和前期にかけての参詣をめぐる社会的文脈と空間づくり -」

湯浅賞受賞

越野あすかにインタビュー

今回、越野さんの論文の内容に関する質問、そして受賞の喜びを伺うためインタビューを行った。
11月15日新宿の喫茶店にて。聞き手：岡山 但馬



<論文選考理由(原文より編集者抜粋)>

本論文は福井県坂井市の旧三国町を対象に地方の歴史的市街地において、地域構造と個別的な所有・流通の両面から空き地を動かす際の条件を理解することを試みた論文。都会の空き地と異なる近年の人口減少や高齢化の進展より維持管理が行き届かなくなっている地方都市の空き地問題対策に反映できる重要な成果を示している。



日本不動産学会授賞式の様子。(提供：越野)

- まず湯浅賞受賞の率直な感想を聞かせてください。

越野：自分ではちゃんとした論文がかけた自信がなかったので、評価していただいて嬉しかったです。

- 修士論文で苦労した、やりがいがあったなどのエピソードがあれば教えてください。

越野：難しいなと感じたことは、個々の空地にはそれぞれ理由で空き地になっていて、それを一般化して論文で書けるのか、論文としてまとめることで地元に戻元できるのかなど、ずっと悩んでいました。逆にプロジェクト[※]もやっていたので三国についてはある程度わかったつもりではいたんですが、行けば行くほど新しいことがわかった部分が面白かったです。地元に住んでいる人しかわからないことをどんどん教えてもらって新しい知識が増えていくのが楽しかったです。なのでまとめ方はすごく悩んだけど、調べる過程は全然苦じゃなくて。町の人も聞いたらなんでも教えてく

ださって、とてもお世話になったなと感じています。

- このテーマに決めたのは、いつ頃ですか？

越野：祖母が住んでいる金沢の家の周りでもどどん空き地が増えていて、その不安から漠然と空き地に関してやりたいなと思っていました。そして1年の夏頃、プロジェクトの調査で三国の町を歩いていると、町の中でも場所によって空き地の種類が全然違うことに気付いて、それを調べてみようと思ったのがきっかけでした。最初は基礎調査みたいに調べて、他の町と比較をするのかなど具体的な部分は後から決めていきました。

- 論文では三国プロジェクトで得た知見と、個別の調査のバランスをどのように考えていましたか？

越野：第1章の三国の町の概要の部分は、けっこうプロジェクトで調べた情報を載せました。プロジェクトで関わっている地域で論文をしていると、進んでいくうちに自分の調査の内容がプロジェクトでも使えたらwin-winかなって思えてきて、なるべく調査で得た内容はプロジェクト内で発信したりしていました。

- 調査はどのように進めていきましたか？

越野：最初は何からしていいかわからなかったので、とりあえず調べて、それを表や地図にまとめて傾向が掴めないかと模索していました。そのうえで数人にヒアリングしてみると、ヒントを得られたり、やりたいことが見えてきて、それを明らかにするのに必要な調査をして、といった感じでやっていきました。

- 調べたが論文には載っていない情報もありますか？

越野：調べたけどどうもまとまらなかったものはあります。中でもどうしても重要でこれからにつながるなと思ったところは論文の事例の章に載せました。

- 来年春に三国にUDCSができるなど、三国の動向はどのようにみえていますか？

越野：調査をしているときに話を聞いていると、空き地に関して悩んでいる人がすごく多くて、「これどうしたらいいの？教えてよ。」と逆に質問されることもあって。それに答えられない自分がすごくもどかしかったです。それに対して、UDCとかで互いに悩みを聞いて、一緒に考えていけば、徐々に動いていきそうだと期待しています。地元の人もそういう場を待っているんじゃないかと思っています。



インタビューの様子。

※三国プロジェクト：福井県坂井市三国町を対象として、歴史的市街地での「まちなみ保全」と「住み続けられるまちの実現」を目標として調査や研究、まちづくりを行うプロジェクト
※研究室マガジン2017年3月号(251号)にて、論文提出後の越野さんの思いも掲載しています。

論文を読んで

- 地方市街地の駐車場利用を考える -



三国の空き地(撮影：越野)

越野さんの論文は、三国プロジェクトで得た住民とのつながりや町の現状を活かしてインタビューなどの調査を行なっている。しかし住民のナマの声だけに頼らず、アンケートや地図のプロットのような客観的な調査も組み込まれ、三国を訪ねたことのない私にも読みやすかった。また空き地を11事例集めた部分は、

それぞれの土地が空き地となった固有の経緯が述べられており、現場の状況がリアルに述べられている。地域にどっぷりとながらながら、土地への愛を持って執筆された論文であり、越野さんの人柄が表れた論文のように思う。

この論文を読み、空き地に関して改めて見つめる機会となった。論文中、三国の空き地の中には駐車場利用のために家を取り壊した土地があったという記述がある。現在私がプロジェクトで関わっている愛媛県内子町の市街地でもまさにこの問題に直面している。内子町の市街地には人気の芝居小屋「内子座」があり、内子座で公演やイベントがあると、町の駐車場が足りなくなる。内子座以外にも祭や、商店街のイベントの際には車で訪れる人が多く、駐車場不足が問題となっている。しかし、安易に町に駐車場を作ると、町の空間的秩序を壊すことになり、町の魅力や日常的コミュニ

ティ空間を壊すことにも繋がりがねない。そうした中での立地や駐車場自体のデザインは町の魅力の鍵を握っていると感じる。

都市デザイン研究室では2012年に広島県福山市鞆町を舞台に「鞆の浦と空き地 - 空き地とともに暮らす -」が発行されている。中には鞆の町の空き家の場所や祭日の利用が伝えられ、防災拠点、園芸空間などの提案がされている。確かに車は地方や農村に行けば行くほど生活の必需品であり、駐車場は必要となってくる。しかしそれは悲観するだけでなく、祭日のおっちゃん溜まり場や普段子供が縄跳びなどで遊ぶ場としても利用される。生活者は駐車場としてだけでなく、他用途にも利用している。駐車場+αの利用を念頭に入れ、かつ町のデザインに組み込むことで、より地域に根ざした駐車場ができるのではないだろうか。

(岡山)



『都市保全計画』

1000頁を越える大部となった教科書である。東京大学出版会から2004年刊。1990年から都市工で都市保全計画の講義を始めたものの、当時こうした名前の講義はおそらく他の大学ではなかったと思うので(今でもそうかもしれないが)、授業の題材そのものもまったくの自前で、手探りで進めるしかなかった。その過程でやはり教科書が必要だと思ふようになり、思ふ立って執筆したのが本書である。本来教科書というもの功成名遂げたあとに執筆すべきものかもしれ

ないが、私は40代のテーマとしてこの本を書きあげることが目標とした。50代はおそらく社会的な活動で忙殺されるだろうから、教科書を執筆するならその前に、と思ったからである。(今振り返って、この判断は間違っていなかったと思う。)上梓した時に52歳になっていた。

書き出しはみたものの、類書がまったくない状況だったので、資料収集も章立ても暗中模索だった。途中でみるみる膨らんでいく企画に、編集者からは「こんな機会是他にないのだからこの際、すべて盛り込むべきだ、一冊の本として製本できる限度まで厚くして構わない」とはっぱをかけられ、参考文献や年表から付録の法規や憲章類、訳語一覧から索引まで、巻末の付録類だけで220頁を超えるという膨大な教科書(というには高すぎて学生には手が出ないものとなってしまった)が出来上がった。

一部は博士論文の成果も取り入れたので、執筆の最初からすると20年あまりが経過していると思う。作業量としては単行本3冊分くらいはあった。校正も大変で、出張のたびに少しずつ赤字を入れ、出張先から小分けにして出版社に郵送したのもいい思い出となっている。一番大変だったのは年表で、年のみならず月日まで入れたため、調べた資料のほうの間違っている場合など、さらにダブルチェックが必要で、不正確な記述は後進の大迷惑となることを文字通り身をもって学んだ。

教科書ができて一番便利に感じたのは私自身で、事典として縦横に活用した。もちろん講義にも利用したが、不思議なもので、あれだけ教科書を書き上げることを使命としていたはずなのに、出来てしまうと、知りたければこの本を読めばいいではないか、と思ってしまう、授業にはより先のことを持ち出したくなるのである。つまり教科書に載っていないようなことをしゃべりたくなるのだ。

思えば、私の書いた本は、『都市保全計画』に限らず、類書がないような性格のものが多い。前人未踏のところをかき分けて前進するのが性に合っているのだろうか。個人的にはそうした性格ではないつもりだが、こと何かを創り出すということになるとどうもそちらの方向へ向かっていくことの方が多そうである。つまり、誰かと先着を競うのではなく、私がやらなければ、新分野が拓かれないといった仕事をしたと思うようなたちなのである。

いずれにしても、この本でひとつのディシプリンを生み出すというこの片鱗はできたかなと思う。この本で2005年の日本都市計画学会の論文賞を頂いた。私のこれまでの仕事は必ずしも都市計画学会の「実証主義的な」学風には沿っていないだったので、あまり居心地がいいとはいえない時代が続いたが、論文賞を授与されて、少なくとも私のいる場所が否定されているわけではないと思えたのは嬉しかった。(西村)

2年演習、進行中！ —TAからの現場報告—

The First DUE Studio of Sophomores!

text_TAJIMA/M1

今年も10月より2年演習「都市工学設計製図」が開講しています。現在彼らは、本郷の高台に与えられた約1800m²の敷地に、小規模なオープンスペースと集合住宅を設計するという課題に取り組んでいます。都市工学科に入りたての2年生はこの課題を通じて設計や表現の方法、都市工学の考え方の基礎を学びます。今回都市デザイン研究室からは、先生方に加えM1岡山・篠原・但馬の3名がTAとして参加しています。今年の2年生は、きれいで見やすい図面を描いたり、分析の視点がユニークであったりと優秀です。しかしそんな彼らでも、まだ本郷という土地で何をつくればいいのか、どのような人をターゲットにしていこうかというコンセプトの部分がなかなか詰め切れず、苦勞しているようです。最終ジュリーは12月15日。どのような作品ができあがるのでしょうか。



左：本郷での生活を想像してみた班は「永野さん家の一日」という題名で発表。

右：先生もTAも一人一人丁寧に丁寧なエスキースを行っています。

2年演習の様子はFacebook上に紹介されています。ぜひこちらもご覧ください！

<https://www.facebook.com/UtokyoDUEStudio2017A>



Information

Archives - 11月のweb記事



11.8 上野スクエア構想委員会
3回目の委員会。今回は不忍池のアクティビティ調査と池廻りの設計を提案。学生が発表しました。(M1 中戸)



11.11 浦安住民勉強会
防災まちづくり勉強会のガイダンスを浦安PJが担当。空地調査と空地活用事例を住民の前で紹介。(M1 永門)



11.17 全国町並みゼミ@名古屋市有松
40回目となる全国町並みゼミ。町並み保全活動を担う方々の交流。学生スタッフとして岡山が参加。(M1 岡山)



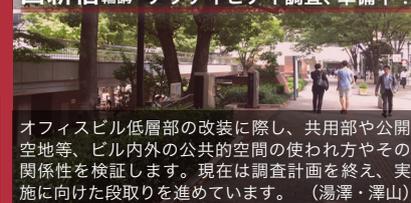
11.21 高島平ヘリテージミーティング
今で5回目のヘリテージMTG。高島平団地とその周辺地域の結びつきを明らかに。(M1 但馬)

Project Headlines -PJ 近況早わかり-

Web記事もご覧ください。 <http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/>

Hey listen, -ちょっと聞いて!

西新宿 講演 アクティビティ調査、準備中!



富士吉田PJ 住民の方々の「生活」を掴む



人々の生活を把握するためのヒアリングを行い、住民の方々が感じている「近所」の範囲や自治会活動などについてうかがうとともに、近隣生活に不可欠な抜け道の調査も実施しました。(宮下)

12月の予定

- 12/3- カトマンス現地調査
- 12/5 内子第2回歴史的風致維持向上計画策定委員会
- 12/21 西村先生退官記念シンポ忘年会@ 鳳明館

✦ 編集後記

寒い。心とかではなく物理的に寒いのだ。ハロウィンが過ぎるといきなりクリスマスが訪れる町並みは、まるでこの気候を表しているようにも感じる。12月になれば毎週のように飲み会があつて、毎週のように懐も寒くなる。しかし、キリスト教では待降節であり質素節約を心がける期間である。日本はまだ主に消費社会であつて、それは文化すらも飲み込みつつある。東京はその筆頭であり、かく言う私も先日スマートフォンを新調してしまつた。(岡山)